

大学生柔道選手におけるライフスキルがキャリア成熟に及ぼす影響：下級生と上級生の特徴

山本, 浩二
関西福祉大学教育学部

島本, 好平
明星大学教育学部

中須賀, 巧
兵庫教育大学大学院学校教育研究科

杉山, 佳生
九州大学大学院人間環境学研究室

<https://doi.org/10.15017/2560367>

出版情報：健康科学. 42, pp.87-95, 2020-03-25. 九州大学健康科学編集委員会
バージョン：
権利関係：

—原 著—

大学生柔道選手におけるライフスキルがキャリア成熟に及ぼす影響 —下級生と上級生の特徴—

山本浩二^{1)*}, 島本好平²⁾, 中須賀巧³⁾, 杉山佳生⁴⁾

The influence of life skills on career maturity in judo athletes - Characteristics of lower grades and upper grades -

Koji YAMAMOTO^{1)*}, Kohei SHIMAMOTO²⁾, Takumi NAKASUGA³⁾,
and Yoshio SUGIYAMA⁴⁾

Abstract

The purpose of this study was to examine the influences of life skills on career maturity in university judo players, focusing on grade differences.

In June 2016, a survey of 509 university judo players (male: 407, female: 102, mean age: 19.71 ± 1.28 years, mean period of experience: 12.37 ± 5.71 years) was conducted using the Appraisal Scale of Required Life Skills for College Student Athletes (Shimamoto et al., 2013) and the Life Career Maturity Scale (Sakayanagi, 1999). The former evaluates the life skills acquired by athletes using 10 dimensions (setting goals, communication, stress management, maintaining physical health and well-being, always making one's best effort, maintaining etiquette and manners, taking responsibility for one's own behavior, thinking carefully, being humble, appreciating others). The latter evaluates the student's life career interest, autonomy and planning ability. The analysis was conducted by classifying students into lower grades (1st and 2nd grades) and upper grades (3rd and 4th grades). In addition, life skills used aspects (self-control skills, goal achievement skills, communication skills and problem-solving skills) classified by

1 関西福祉大学教育学部, Department of Education, Kansai University of Social Welfare, Japan.

2 明星大学教育学部, Department of Education, Meisei University, Japan.

3 兵庫教育大学大学院学校教育研究科, Graduate School of Education, Hyogo University of Teacher Education

4 九州大学大学院人間環境学研究院, Faculty of Human-Environment Studies, Kyushu University, Japan.

*連絡先: 〒678-0255 兵庫県赤穂市新田 380-3

*Correspondence to: Department of Education, Kansai University of Social Welfare, 380-3 Shinden, Ako City, Hyogo 678-0255, Japan.

E-mail: k-yamamoto@kusw.ac.jp

Yamamoto et al. (2019).

As a result of the covariance structure analysis, problem-solving skills in lower grades had a significant positive effect on all aspects of career maturity. On the other hand, upper grades showed that self-control skills and goal achievement skills had a significant positive effect on all aspects of career maturity. Based on above results, it was suggested that there are differences in life skills to increase career maturity according to grades. Therefore, it is necessary to provide appropriate educational support according to the grade of university judo players.

Key words: university athlete, budo, grade, educational support, career formation

(Journal of Health Science, Kyushu University, 42: 87-95, 2020)

はじめに

2020年東京オリンピック・パラリンピック競技大会を間近に控え、アスリートは自らの競技パフォーマンスの向上や勝利を目的として、指導者やチームメイト等とのコミュニケーションを図りながら日々の厳しいトレーニングに取り組んでいる。その一方で、一部のアスリートにおいて、現役期間中における高い自己投入により、社会生活におけるさまざまな選択肢の中から競技を最優先し、競技引退後の不適応につながる可能性がこれまで指摘されている²¹⁾。これを裏付けるように、一部のアスリートや元選手におけるハラスメント等の問題行動が複数の競技団体で報道される¹⁰⁾など、深刻な社会問題として世間を賑わせている。このような一部のアスリートによる問題行動によって、社会全体におけるスポーツの価値を低下させてしまう可能性があり、アスリートに対する教育支援が喫緊の課題であると考えられる。

これらの課題を踏まえ、日本スポーツ振興センター⁹⁾は、スポーツ指導者や団体に対してトップアスリートとしてのアスリートライフに必要な環境を確保しながら、現役引退後のキャリアに必要な教育や職業訓練を受け、将来に備える「デュアルキャリア」の施策推進に向けた提案を行っている。その後、スポーツ庁を中心として、アスリートへのキャリア教育プログラムの調査や開発および実践といった、さまざまなキャリアサポートが今なお活発に行われており⁷⁾、東京オリンピック・パラリンピック後も継続して行われることが、アスリートの問題行動防止や望ましいキャリア実現にむけて重要であるといえよう。その中で、大学に所属して学業との両立を図りながら、競技に取り組む大学

生アスリート（以下「学生アスリート」と略す）においては特に、キャリア教育支援が必要になると考えられる。なぜなら、学生アスリートはトレーニングや試合、合宿や遠征等による時間的制約によって学業や就職活動に支障をきたし、競技引退後のキャリアをスムーズに獲得することが困難になると指摘されている¹⁹⁾ためである。したがって、学生アスリートに対する教育支援について、大学側は現役生活を送る在学中に行う必要があるといえよう。

そのような学生アスリートに対する教育支援について、近年ではライフスキル（Life-skills：以下「LS」と略する）という概念に着目した取り組みが活発に展開されている。LSとは「日常生活で生じるさまざまな問題や要求に対して、建設的かつ効果的に対処するために必要な能力」²²⁾と定義される学習可能な心理社会的能力であり⁵⁾、目標設定スキルやコミュニケーションスキル等が中核をなすスキルとして挙げられる。また、アスリートを対象とした幅広い教育支援を実現するために、LSプログラム研究会の発足やスタート教材が開発されるなどの成果が報告されている¹²⁾。その中で、島本ほか¹³⁾はアスリートに求められるLSの10の側面を明らかにし、その評価尺度を開発している。そして、本尺度を用いて、個人種目を実施するアスリートにおけるLSと競技成績が正に関連していることが報告されている^{8) 16) 24)}。また、先述したアスリートのキャリア教育支援について、清水・島本¹⁵⁾や Shimizu et al.¹⁸⁾は、LSが競技引退後のキャリア獲得を促進していることを報告している。さらに、LSとキャリア獲得には「知見の広い、年齢にふさわしいキャリアを決定するための個人のレディネス」⁵⁾等と定義される「キャリ

ア成熟」が媒介変数として存在し、LS とキャリア成熟にも正に影響すると指摘されている³⁾。キャリア成熟とは、坂柳¹⁾が上述の定義をもとに、主に「人生や生き方に対する考え方」であるとし、それを評価することができる「人生キャリア成熟尺度」を開発した。当該尺度は、自己のキャリアに対しての「キャリア関心性」（以下「関心性」と略す）や「キャリア自律性」（以下「自律性」と略す）、「キャリア計画性」（以下「計画性」と略す）で構成されている。そして、福井ほか³⁾の示した因果モデル（図1）をもとに、山本ほか²⁵⁾は大学生柔道選手を対象にLSがキャリア成熟に及ぼす影響について性別などの個人属性から検証した結果、LSの高次の側面である目標達成スキルや社会規範スキルがキャリア成熟の複数の側面に正の影響を示したことを明らかにしている。これらの研究に鑑みると、競技成績やキャリア成熟に正に影響するLSを教育支援に用いることによって、学生アスリートに対する効果的な教育プログラムが提供できると考えられ、その必要性が挙げられる。また、学生アスリートの教育支援について、大学入学直後や進路選択を控えて就職活動に取り組むなどの「時期（学年）」によって、指導内容や方法は異なることが予想される。したがって、学生アスリートのLSがキャリア成熟に及ぼす影響を学年の違いも含めて検討することが必要であると考えられる。

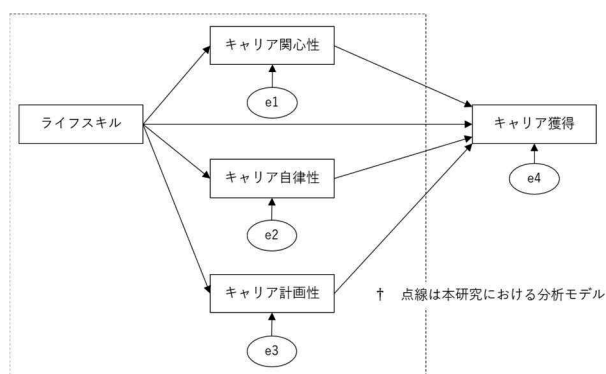


図1 本研究の分析モデル

そこで本研究では、学生アスリートを対象としてLSがキャリア成熟に及ぼす影響について、福井ほか³⁾の因果モデルをもとに学年ごとに検討し、効果的なLS教育プログラムの基礎的な知見を抽出することを目的とした。なお、本研究では個人種目の「柔道」に着目する。柔道は、2016年のリオデジャネイロオリンピックにお

いて3つの金メダルを獲得し、2020年の東京オリンピックでも活躍が期待される一方で、組織内での各種ハラスメントや大学生選手の暴力問題等が問題視されている¹⁾。このような問題行動を防止するための教育支援について検討するため、大学生柔道選手を調査対象として取り上げる。

方法

1. 調査対象者および調査時期

調査対象者は、関東や関西地区の9つの大学に所属している柔道選手570名を対象とし、その内、調査に不備なく回答した509名（男子：407名、女子102名、平均年齢：19.71±1.28歳、競技経験平均年数：12.37±5.71年）を分析の対象とした（有効回答率89.3%）。この調査対象者は全日本学生柔道連盟の1部に所属し、全日本学生柔道優勝大会および全日本学生柔道体重別選手権大会（以下「インカレ」と略する）での優勝や入賞をチーム目標として競技に取り組んでいる。なお、調査時期は2016年の5月中旬から6月中旬であった。

2. 調査内容

2-1. 基本属性

性別や年齢および学年、階級、段位、競技経験年数について回答を求めた。

2-2. アスリートに求められるライフスキルの測定

島本ほか¹³⁾が、日本一を達成する等の優秀な競技成績を残した指導者の実践的な経験をもとに開発した尺度である。アスリートに求められるLSを、「目標設定（項目例：目標を達成するための計画を具体的に立てている）」、「コミュニケーション（項目例：同学年だけでなく、先輩や後輩、指導者ともうまく付き合っている）」、「ストレスマネジメント（悩み事はきちんと話を聞いてくれる人に打ち明けている）」、「体調管理（項目例：適度な睡眠をとり、次の日に疲れを残さないようにしている）」、「最善の努力（項目例：なかなか成果が出ない時でも、自分を信じて努力しつづけることができる）」、「礼儀・マナー（項目例：対戦相手や審判に失礼になるようなことはしない）」、「責任ある行動（項目例：失敗から得た教訓を今後活かしている）」、「考える力（項目例：周囲の人の考えをもとに、自分なりの答

えを導き出すことができる)」、「謙虚な心(項目例:調子の乗りそうな時でも、その気持ちをうまく抑えている)」、「感謝する心(項目例:自分を支えてくれている人への感謝の気持ちを、いつも胸に留めている)」の10側面(各側面4項目、計40項目)から評価することができる。項目の評定は、「4:とても当てはまる」、「3:まあまあ当てはまる」、「2:あまり当てはまらない」、「1:全然当てはまらない」の4段階の自己評定で行い、分析の際には選択肢の数値をそのまま得点化した。評定値が高いほどスキルの獲得レベルが高いと解釈される。教示文は「競技場面を含めた日々の生活全体における様子についてお聞きします。以下の各々の項目について、現在の自分に最も当てはまる選択肢の数字1つに丸印を付けて下さい」とし、調査対象者の競技場면을主に想定した日常生活全般における現時点での様子について回答を求めた。また、逆転項目の評定値は当該下位尺度得点算出の際に反転処理された。

なお、「責任ある行動」については、その項目内容から「同じような失敗を二度繰り返さないようにしている」や「失敗をした時には、すぐにその分を取り返そうと努力する」など、自らが失敗をした際に起こす行動や態度と捉えることができる。そのため、山本ほか²⁵⁾と同様に、以後の分析では「個人の失敗事態に対する挽回行動」(以下「挽回行動」と略する)と読み替えて解釈することにした。

2-3. キャリアに対する考え方の測定

坂柳¹¹⁾が「キャリアの選択・決定やその後の適応への個人のレディネスないし取り組み姿勢である」というキャリア成熟の定義(King, 1989)を踏まえ、キャリアを人生や生涯という視点から捉え開発した尺度である。本尺度は、人生や生き方に対する考え方と捉えた人生キャリア成熟のレベルを、自己の人生キャリアに対して積極的な関心を持っているかを示す「関心性(項目例:人生設計や生き方に役立つ情報を、積極的に収集しようとしている)」, 自己の人生キャリアへの取り組み方が自律的であることを示す「自律性(項目例:人生や生き方には、自分で責任を持つ)」, 自らの人生キャリアに対して将来展望を持ち計画的であることを示す「計画性(項目例:これからの人生や生き方について、

自分なりの見通しをもっている)」の3側面から評価することができる(各側面9項目、計27項目)。項目の評定は、「5:とても当てはまる」、「4:まあまあ当てはまる」、「3:どちらともいえない」、「2:あまり当てはまらない」、「1:全然当てはまらない」の5段階の自己評定で行い、分析の際には選択肢の数値をそのまま得点化し、評定値が高いほどキャリア成熟の程度が高いと解釈される。教示文は「あなたの将来に関する展望についてお聞きします。以下の各々の項目について、現在の自分に最も当てはまる選択肢の数字1つに丸印を付けて下さい」とし、現時点での人生や生き方に対する考え方について回答を求めた。なお、逆転項目の評定値は当該下位尺度得点算出の際に反転処理された。

3. 手続きおよび倫理的配慮

調査では「日本体育学会研究倫理綱領」を踏まえ、調査対象者に対する倫理的配慮を行った。まず、事前に本研究者が各大学柔道部の部長や監督およびコーチに対して、調査の目的や方法、対象者に対する倫理的配慮について説明し調査協力を得た。具体的な倫理的配慮は、「調査は無記名式であること」や「調査への協力は強制ではなく任意であること」、そして「回答の内容により、当該部内の競技者としての評価に影響が及ぶことはない」という内容である。また、調査票の冒頭に「調査結果はすべて統計的に処理され、個人を特定するものではない」とことや「調査への協力は任意である」ことを教示文として示すことに加え、調査実施者から口頭で伝えてもらった。なお、調査は郵送法によって実施され、調査票の回収および返送作業は各チームの監督およびコーチによって行われた。

4. 分析モデルの設定

大学生柔道選手をはじめとするアスリートは、日々の競技活動を通じてLSを獲得していることが先行研究において明らかにされている。アスリートは、その活動を通じて獲得されたLSをもとに、今後の人生や生き方に対する考え方を成熟させていると考えられ、現に個人種目を行うレスリングや柔道を対象として、両変数間の関係性が検討されている¹⁷⁾²⁵⁾。以上のことを踏まえ、本研究では大学生柔道選手におけるLSを独立変数、人生キャリア成熟を従属変数としたモデル

(図1)を設定した。当該モデルによって、LS獲得とキャリア成熟との関係を検討することができる。

5. 統計処理

分析ではまず、LS獲得やキャリア成熟のレベルを学年で比較するために一元配置分散分析を実施し、有意な主効果が認められた場合にはTukeyのHSD法による多重比較を行った。次に、図1の分析モデルの検討を、高次のLSを独立変数、人生キャリア成熟尺度の各下位尺度を従属変数とし、大学生柔道選手における学年の2群(「下級生(1・2年生, n=240)」・「上級生(3・4年生, n=269)»)ごとに共分散構造分析を実施した。当該分析の際には、LSを山本ほか²⁵⁾によって見出された大学生柔道選手における高次の側面を用いて実施した。その理由については、分析結果の解釈を容易にすることや分析の際に発生する多重共線性を解消するためである。なお、山本ほか²⁵⁾が示したLSの高次の側面は、「一般的な社会規範スキル(礼儀・マナー、謙虚な心、感謝する心)」(以下「社会規範スキル」と略する)、「目標達成スキル(目標設定、最善の努力、体調管理)」、「コミュニケーションスキル(コミュニケーション、ストレスマネジメント)」、「問題解決スキル(挽回行動、考える力)」の4側面であった。また、分析モデルにおける適合度の評価にはGFI(Goodness of Fit Index), AGFI(Adjusted GFI), CFI(Comparative Fit Index), RMSEA(Root Mean Square Error of Approximation)を用いた。モデルを採択する基準について、GFI, AGFI, CFIはそれぞれ0から1までの値

をとり、1に近づくほど適合が良いとされる。また、GFIとCFIは.90以上がモデルを採択する基準とされ、AGFIがGFIに比べて著しく低下する場合は良いモデルといえない²³⁾。RMSEAについては.08以下がモデルを採択する基準とされ、0に近づくほど良いモデルと判断される²¹⁾。本研究におけるすべての分析は、IBM SPSS Statistics 26.0とAmos 26を使用し、有意水準は5%とした。

結果

1. 学年によるライフスキルと人生キャリア成熟の比較

大学生柔道選手のLSおよびキャリア成熟の程度を学年で比較した結果、LSの体調管理($F(3, 505)=3.04$)と最善の努力($F(3, 505)=3.23$)において有意な主効果が認められた(いずれも $p<.05$)。その後の多重比較の結果、ストレスマネジメントでは1年生の得点が3年生よりも、最善の努力では1年生の得点が4年生よりも有意に高く示された。一方で、キャリア成熟の各側面において有意な主効果は認められなかった。

2. 高次ライフスキルが人生キャリア成熟に及ぼす影響
下級生の大学生柔道選手

まず、分析モデルの各適合度指標は、下級生においてGFI=.98, AGFI=.93, CFI=.99, RMSEA=.07であり、十分に基準を満たす値であった。モデル内に示す有意なパス係数について述べると、問題解決スキルがキャリア成熟のすべての側面に正の影響を示した(順に、 $\beta=.48, \beta=.44, \beta=.43$)。また、社会規範スキル

表1 大学生柔道選手の学年におけるライフスキルとキャリア成熟の一元配置分散分析と多重比較の結果 (n=509)

	1年生 (n=107)		2年生 (n=133)		3年生 (n=121)		4年生 (n=148)		F値 (3, 505)	多重 比較
	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD		
①目標設定	10.75	2.69	10.29	2.47	10.31	2.58	10.11	2.67	1.27	
②コミュニケーション	12.01	2.30	12.13	2.10	11.93	2.15	11.70	2.51	.89	
③ストレスマネジメント	12.52	2.58	11.69	2.58	11.51	2.85	11.72	2.85	3.04*	1年>3年
④体調管理	11.35	2.07	11.08	2.09	10.91	2.12	10.60	2.37	2.60	
⑤最善の努力	12.36	2.47	12.05	2.32	11.66	2.11	11.51	2.47	3.23*	1年>4年
⑥礼儀・マナー	13.08	2.27	12.75	2.37	12.21	2.40	12.71	2.59	2.53	
⑦挽回行動	12.53	2.12	12.24	2.08	11.95	1.91	11.96	2.08	2.14	
⑧考える力	12.14	2.06	11.62	2.11	11.41	1.94	11.64	2.05	2.55	
⑨謙虚な心	12.21	1.94	12.14	2.04	11.99	1.93	11.93	2.08	.53	
⑩感謝する心	13.83	2.09	13.41	2.00	13.18	2.09	13.28	2.29	2.06	
⑪キャリア関心性	34.06	4.81	32.83	5.04	32.49	5.25	32.97	5.41	1.93	
⑫キャリア自律性	35.87	4.92	34.30	5.55	34.02	5.32	34.54	5.50	2.61	
⑬キャリア計画性	33.55	5.53	32.53	5.59	31.86	5.52	32.32	5.49	.13	

† * $p<.05$

は自律性 ($\beta=.14$) に、目標達成スキルは計画性 ($\beta=.15$) にそれぞれ正の影響を示した。さらに、影響の説明力を示す決定係数 (R^2) は、関心性が $R^2=.23$ 、自律性が $R^2=.29$ 、計画性が $R^2=.29$ であった。

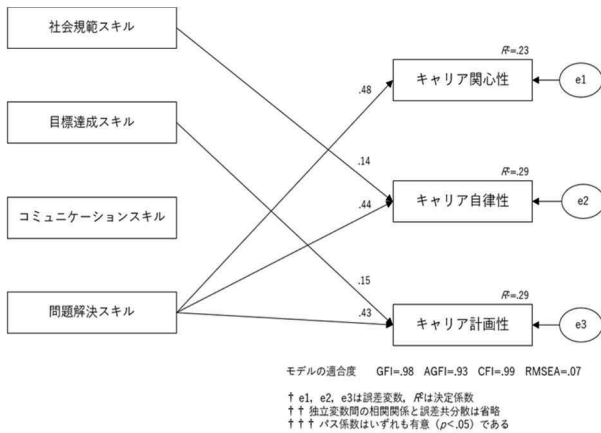


図2 大学生柔道選手のライフスキル獲得がキャリア成熟に及ぼす影響 (低学年, $n=240$)

上級生の大学生柔道選手

モデルの適合度指標は、 $GFI=.98$ 、 $AGFI=.92$ 、 $CFI=.99$ 、 $RMSEA=.08$ であったことから、概ね基準を満たす値であることが確認された。モデル内に示す有意なパス係数について述べると、社会規範スキルと目標達成スキルがキャリア成熟のすべての側面に正の影響を示した (社会規範スキル: 関心性 $\beta=.39$ 、自律性 $\beta=.47$ 、計画性 $\beta=.27$; 目標達成スキル: 関心性 $\beta=.22$ 、自律性 $\beta=.21$ 、計画性 $\beta=.35$)。さらに、決定係数 (R^2) は、関心性において $R^2=.27$ 、自律性において $R^2=.35$ 、計画性において $R^2=.28$ であることが示された。また、いずれの群においても高次の LS におけるコミュニケーションスキルや問題解決スキルは、人生キャリア成熟に有意なパスが示されなかった。

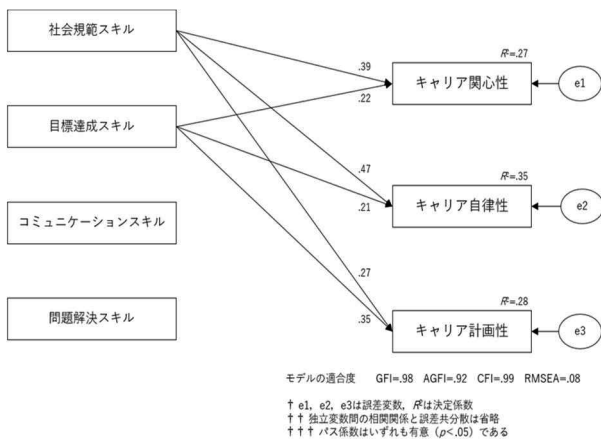


図3 大学生柔道選手のライフスキル獲得がキャリア成熟に及ぼす影響 (高学年, $n=269$)

考察

1. ライフスキルおよびキャリア成熟の学年差

分析の結果、ストレスマネジメントと最善の努力に1年生の得点が高く示されたことから、下級生は上級生よりもLSの一部において、その程度が高いことを示唆している。島本ほか¹³⁾は、多様な競技種目を実施しているアスリート全般において上級生の方がLSを獲得していることを明らかにしているが、大学生柔道選手を対象とした本研究結果は、その知見を支持しない可能性がある。これは、清水ほか¹⁹⁾が効果的な教育支援のためには特定の競技種目を対象とした検討の必要性が示されたものといえる。

有意差が認められたLSの各側面に着目すると、ストレスマネジメントは、自らの悩みを相談相手に素直に打ち明けるなどして、競技生活を主とした日々の精神的健康度の充実を図るスキルを示している。入学直後の1年生は、高校から大学への学校段階の移行による生活や練習環境の変化等によって、大学生活に対する不安を上級生よりも多く抱えている²⁾。そのようなストレスの対処方法として、親や友人もしくはチームメイトに悩み事を素直に話すなどして解決しようと試みる機会が比較的多くあると考えられることから、1年生の当該スキルの得点が高く示されたのではないかと推察される。また、最善の努力は、日々のトレーニングにおいて辛い状況に置かれても、我慢強く努力し続けることを示している。先述のように、入学直後の1年生は、新たな環境下で始まった学生生活に関して比較的強い不安を抱えている²⁾とともに、多くの場合、競技場において上級生選手よりも競技力は劣っていることが予想される。柔道では、相手と試合に近い形式で行う練習方法があり、その中では自らの競技力より高い相手と何度も練習を行って競技力の向上を図る。したがって、1年生は競技力の比較的高い上級生に対して練習を挑み、何度も投げられたり抑え込まれたりするなどの困難な状況下に置かれても、自らの競技力を高めるために努力し続けていると推察される。以上のことに加え、4年生は大学卒業後のキャリア獲得に向けた進路選択のための就職活動が開始され、競技のみに傾倒する機会が少なくなることから、当該側面の得点が低かったと考えられる。

2. ライフスキルがキャリア成熟に及ぼす影響

次に、大学生柔道選手におけるLS獲得がキャリア成熟に及ぼす影響について、下級生と上級生に分類し、群ごとに検討を行った。その結果、各群の分析モデルにおける適合度指標は、それぞれ基準を満たす値であることが示された。以下に、学年ごとにみられた選手の特徴について考察を行う。

下級生の大学生柔道選手の特徴

大学生柔道選手の下級生において、問題解決スキルがキャリア成熟のすべての側面に正の影響を示した。問題解決スキルは、自らの課題や問題に対して対応策や解決方法を自ら導き出すために必要な能力であり、挽回行動と考える力で構成されている²⁵⁾。そのため、下級生は競技場面を含めた日常生活場面において自らの課題を考え解決しようと試みるのが、柔道選手として、そして1人の個人としてのキャリアに対する考え方を成熟させることが示唆される。特に、当該対象者は下級生であり、競技者として柔道を行う期間が長く、今後の人生について考える際には、柔道選手としてのキャリアを比較的強く意識していることが予想される。また、問題解決スキルを構成する両側面は「勝利につながる心がまえ」として位置づけられ、アスリートとしての自己を支える側面である¹²⁾とされる。実際に、大学生柔道選手において競技成績やキャリア成熟に正の影響が示されていることから²⁴⁾²⁵⁾、競技パフォーマンスを発揮するための土台となるスキルであると考えられる。したがって、下級生の大学生柔道選手は、学齡的な特性によって、競技者としての考え方を比較的強く持っていると考えられるため、直近の競技パフォーマンス発揮に向けて、競技場面における自らの課題を見出し、その解決方法を考えて解決しようとするのが、キャリアに対する考え方に直接的な影響を及ぼしているのではないかと推察される。

次に、社会規範スキルがキャリアへの取り組み方が自律的であるかどうかを示す自律性に正に影響した。社会規範スキルは、自らの感情や言動をコントロールし、競技者として適切に振る舞うために必要な能力であり、礼儀・マナーや謙虚な心および感謝する心から構成される²⁵⁾。柔道に代表される武道では「礼」の意味や心がまえが強調され⁸⁾、選手は競技レベルの程度

に関わらず、長期にわたって指導を受けている。その指導を継続して受けることによって、選手は礼の意味等について経験的に理解し、身に付けていくと考えられる。このことに鑑みると、社会規範スキルが今後の人生に対する自律的な考え方との間に関係性が認められることは十分に考えられることである。さらに、目標達成スキルが自らのキャリアに対する将来展望を持ち計画的であるかどうかを示す計画性に正の影響を示した。目標達成スキルは、自らが設定した目標を達成するために、適切に体調を管理し、粘り強く努力していくことを示しており、目標設定や体調管理、そして最善の努力を包含している²⁵⁾。その中で、目標設定は「目標を達成するための計画を具体的に立てている」という項目内容がみられるように、自らの目標を達成するための短期目標の設定などの計画的な目標設定や、自らの能力に応じた段階的な目標を設定できることを示している。また、体調管理について、柔道は階級制で行われており、大会に出場するために多くの選手が減量を行っている。その際の急激な減量は、心身のコンディションに悪影響を及ぼすことが報告されている⁴⁾ことから、十分な競技パフォーマンスの発揮には計画的な減量が必要であるといえる。これらのことから、下級生の大学生柔道選手における目標達成スキルが、今後の人生や生き方に対する計画的な考え方に肯定的な影響を及ぼしたと推察される。以上のことから、下級生の大学生柔道選手は学齡的な特性によって、選手としてのキャリアを強く意識していると考えられ、自らの将来的なキャリアに対しても、競技パフォーマンス発揮の土台となるスキルが正の影響を及ぼしていると推察される。

上級生の大学生柔道選手の特徴

大学生柔道選手の上級生において、社会規範スキルと目標達成スキルがキャリア成熟のすべての側面にそれぞれ正の影響を示した。このことから、上級生において自らの言動をコントロールし競技者として適切に振る舞うスキルや目標を達成するために必要なスキルは、今後の人生や生き方に対する考え方に肯定的に影響していることが示唆される。まず、社会規範スキルのキャリア成熟にみられた多様な影響は、上級生になると就職活動やインターンシップ等によって一般的な

実社会に関わる経験をすることによるものであると推察される。それは、選手がこれまでの競技活動によって培ってきた競技者として適切に振る舞うスキルだけではなく、就職活動等での一般常識やマナー等を体験することによって、一社会人としての幅広い礼儀やマナーを身につけるとともに、自らの希望する職業や進路選択について再考する契機になると考えられるためである。このことを追認するように、社会規範スキルは、同様にキャリア成熟のすべての側面に影響がみられた目標達成スキルよりも、関心性や自律性に比較的強いパスの値が示されていることから、選手が自らの今後のキャリアに対する興味や関心を抱き、主体的な考え方を持っていることが示唆される。

次いで、目標達成スキルは、競技者としてのキャリアを切り開くための中心的なスキルであり²⁵⁾、自らの競技力向上を目的とした大学での競技生活を通じて獲得していくものであると考えられる。また、本結果は、競技者として目標を達成するための日々の適切な体調管理や我慢強く努力し続けることが、競技者としてのキャリアに加え、今後のキャリアに対する考え方を充実させていく可能性が示唆される。その理由として、大学での競技生活において、選手は自らと同様に目標を達成するために日々のトレーニングを行ってきた、所属する大学の先輩となる選手の卒業後の進路決定までの過程を直接的・間接的に触れる。さらに、多くの選手が大学卒業を選手としてのキャリアの節目として競技引退を考えることも多く、学年が進むにつれて卒業後のキャリアについて考える機会が増加していくためであると考えられる。また、目標達成スキルの1つに位置づけられる目標設定は、先述のように、目標達成までの期間を計画的に設定するスキルであることから、社会規範スキルよりも計画性に比較的強いパスの値が示されている。したがって、上級生の目標達成スキルは自らのキャリアに対して計画的な考え方を示す側面に比較的強い影響を持つことが示唆される。これらのことから、上級生の大学生柔道選手は自らの競技引退を見据えて、大学卒業後のキャリアに対する考え方を多様に成熟させていることが示唆される。

以上の考察を踏まえ、今後の主な課題について述べる。本研究は、両変数間の関係性について一時点の横

断調査によって検討した。今後は、清水・島本(2014)のように、縦断調査などを用いて大学生柔道選手を対象とした大学4年間にわたるLSやキャリア成熟の経時的変化を把握することが必要であるといえる。それにより、LSなどの変化に応じた適切な教育プログラムの立案や実施が可能になる。このことを踏まえ、大学生柔道選手に対する教育支援を、教育と競技の両側面から実施していくことが、望ましいキャリアの実現には重要であるといえる。

まとめ

本研究では、大学生柔道選手におけるLSがキャリア成熟に及ぼす影響について、学年差に着目して検討することを目的とした。まず、調査対象者を下級生(1・2年生)と上級生(3・4年)に分類し、群ごとに共分散構造分析を実施した。その結果、下級生は「問題解決スキル」が、上級生は「社会規範スキル」と「目標達成スキル」がキャリア成熟のすべての側面に正の影響をそれぞれ示した。このことから、大学生柔道選手は学年によって、今後の人生や生き方に対する考え方に影響を及ぼすLSに違いがみられると考えられる。そのため、選手に対して直接的な指導を行う指導者や大学側は、競技と教育の両側面から効果的な教育支援を実施するために、当該スキルの獲得を促進する取り組みが必要であるといえよう。

謝辞

調査実施に際し、ご協力いただきました各大学柔道部の監督やコーチ、選手の皆様に心より御礼申し上げます。

引用文献

- 1) 栗野仁雄(2016)暴力根絶叫ばれる柔道界に波紋。城倉由光編, サンデー毎日, 95(28): 30.
- 2) 藤井義久(1998)大学生生活不安尺度の作成および信頼性・妥当性の検討. 心理学研究, 68: 441-448.
- 3) 福井健人・島本好平・山本浩二(2017)学生アスリートのライフスキルとライフイベントへの対処との関連—キャリア成熟の媒介効果に着目して—。九州スポーツ心理学研究, 29: 40-41.

- 4) 藤本太陽・園部豊・小嶋新太・田辺勝・山本洋祐・楠本恭久 (2015) 大学男子柔道選手の短期間の減量に関する実態調査. 講道館柔道科学研究紀要, 15 : 135-149
- 5) 川畑徹朗 (1997) 21 世紀の健康教育とライフスキル教育—ライフスキルの定義と, その教育意義について—. 学校保健のひろば, 5 : 88-91.
- 6) King, S. (1989) Sex differences in a causal model of career maturity. *Journal of counseling and development*, 68: 208-215.
- 7) 文部科学省 (online2) スポーツキャリアサポート戦略. https://www.mext.go.jp/sports/b_menu/sports/mcatetop05/list/detail/1419295.htm (参照日 2019 年 12 月 10 日)
- 8) 本村清人 (2009) 武道に独自の「礼」その意味と価値とは何か. *体育科教育*, 57 (15) : 9.
- 9) 日本スポーツ振興センター (2014) 我が国における「デュアルキャリア」施策の推進に向けて. 平成 25 年度文部科学省委託事業「デュアルキャリア」に関する調査研究報告書 : 203-211.
- 10) ニッポンドットコム (online1) 相次ぐスポーツ不祥事 : 東京五輪に向けてハラスメントの根絶を. <https://www.nippon.com/ja/currents/d00435/> (参照日 2019 年 12 月 10 日)
- 11) 坂柳恒夫 (1999) 成人キャリア成熟尺度 (ACMS) の信頼性と妥当性の検討. *愛知教育大学研究報告, 教育科学*, 48 : 115-122.
- 12) 島本好平 (2009) アスリートのためのライフスキルプログラム再考. *Sports medicine*, 21 (5) : 46-47.
- 13) 島本好平・東海林祐子・村上貴聡・石井源信 (2013) アスリートに求められるライフスキルの評価—大学生アスリートを対象とした尺度開発. *スポーツ心理学研究*, 40 (1) : 13-30.
- 14) 島本好平・米川直樹 (2014) 高校生ゴルフ競技者に学研究, 59 : 817-827.
- 15) 清水聖志人・島本好平 (2011) 大学生トップアスリートのキャリア形成とライフスキル獲得との関連. *日本体育大学紀要*, 41 (1) : 111-116.
- 16) 清水聖志人・島本好平 (2012) 男子大学生レスリング競技者におけるライフスキルと競技成績との関連. *体育経営管理論集*, 4 : 47-53.
- 17) 清水聖志人・島本好平 (2014) 大学生トップアスリートにおけるキャリア教育プログラム作成に向けた縦断的検討. *SSF スポーツ政策研究*, 3 (1) : 48-53.
- 18) Shimizu, S., Shimamoto, K. and Tsuchiya, H. (2015) The Relationships between Life skills and post-graduation employment for top college student wrestlers in Japan. *International Journal of Sport and Health Science*, 13 : 17-22.
- 19) 清水聖志人・高橋義雄・河野一郎 (2010) 大学運動部の指導・運営内容差異による就職状況の比較—レスリング競技者を対象として—. *スポーツ産業学研究*, 20 : 119-129.
- 20) 豊田秀樹 (1992) SAS による共分散構造分析. 東京大学出版会, pp.99-118.
- 21) 豊田則成・中込四郎 (2000) 競技引退に伴って体験されるアスリートのアイデンティティ再体制化の検討. *体育学研究*, 45 : 315-332.
- 22) WHO : 川畑徹朗監訳 (1997) WHO ライフスキル教育. 大修館書店, pp.11-30.
- 23) 山本嘉一郎・小野寺孝義 (1999) Amos による共分散構造分析と解析事例. ナカニシヤ出版, pp.1-22.
- 24) 山本浩二・垣田恵佑・島本好平・永木耕介 (2018) 大学生柔道選手におけるライフスキル獲得が競技成績に及ぼす影響. *武道学研究*, 51 (2) : 75-87.
- 25) 山本浩二・島本好平 (2019) 大学生柔道選手におけるライフスキル獲得がキャリア成熟に及ぼす影響. *体育学研究*, 64 : 335-351.